

「魂の牧者のもとに」(ペトロ 1 章 18-25 節)

1 人の苦しみ

「魂の牧者」という言葉が今日の箇所の終わりのところに出てきます。言うまでもなくイエス・キリストのことです。「牧者」、すなわち、羊飼いなことを手紙はさらに「監督者」という言葉でおぎなっています。魂の牧者であり、魂の監督者であるイエス・キリスト。ただ監督という言い方はこの場合私どもの感覚では少し強すぎるかも知れません。元の言葉の意味は、顧みる、心にかける、訪ねる、見舞う、などです。日々の生活に追われさ迷える羊のようであった私どもが今やそのようなキリストのもとに立ち返っている、キリスト者というのはそのような存在だと聖書は語っています。それはどういうことでしょうか。

この手紙を書いたペトロは、福音書が伝えているように、もともとガリラヤ湖で働く漁師でした。しかしキリストの招きにより弟子となり、最年長者として弟子たちのまとめ役も果たしながら、イエスの教えと訓練を受け、伝道の働きにあずかり、ついにはイエスを救い主として告白するに至ります。しかし彼は、キリストが十字架につけられたときには、人間的な弱さのゆえに弟子であることを否定し、信仰の挫折を経験します。彼がそこから立ち直ったのは復活の主に出会ったことによります。出会ったというより、彼のもとにも、裏切った彼のもとにも、復活の主イエスが来てくださったということなのです。そして彼は立ち上がることができました。やがて彼は最初の教会の、イエスを天に見送ったあとエルサレムに生まれた教会の中心的な指導者として各地に伝道し、最後はローマにも赴きます。そしてそこで、伝えられてきたところによれば、皇帝ネロによるキリスト教の大迫害のさい、現在のバチカンの地で、殉教したと言われています。この手紙は、ローマで自らもそのような迫害の下にあったペトロが、同じく苦しみのうちに置かれている各地の教会、そして信徒たちに向けて書き送ったものです。

このペトロと諸教会をつなぐもの、それはまさにそのような苦しみという共通の経験にほかなりませんでした。ですから今日の聖書箇所 1 章 18 節以下には「苦しみ」という言葉がくり返し出てくるのです。苦しみということ、とくに説明する必要はないかも知れません。それは私どもの人生そのものことでもあるからです。ただここでの「苦しみ」については、少しはつきりさせておいたほうがよいと思います。というのも一般的な意味でここで「苦しみ」という言葉を使っているのではないからです。今日の箇所の前半には、「不当な苦しみ」(19 節)とか、「善を行って苦しみを受け」(20 節)といった言葉があります。前後関係から見ればこれが当時教会に多数存在した奴隷——「召し使い」とここでは訳されている——の苦しみを述べたものであることが分かります。重要なことはそのような奴隷の苦しみが、ここでそのままキリスト者

の苦しみとして描かれていることです。善を行って受ける苦しみ、その意味では奴隷が受けていた不当な苦しみ、この苦しみをこの世に生きるキリスト者はだれもが被らざるをえないのだとペトロは語っているのです。ペトロと諸教会が当時のローマ社会で出会っていた苦しみは、何よりもそのような善を行って受ける苦しみであったのです。

2 あなたがたのために苦しみを受け

こうした現実を前にこの手紙を書いてペトロはどうしようというのでしょうか。慰めたい、励ましたいと願ったとして、どう語ろうとしているのでしょうか。一言で言えば、そのような苦しみは恵みにほかならないのだと語っているのです。ペトロは善を行って受ける苦しみ、不当な苦しみのことを語り、それを、二度にわたって、「御心に適うことです」(19,20節)と言っています。そのまま訳せば、神から来る恵み、神における恵みという意味です。

しかし苦しみがどうして恵みなのだろう、神は私どもの苦難を欲しておられるのであろうか、だれもがきつとそう問うはずです。こうした問いは宗教ということに対しても広がっていきます。宗教はこうして社会の不正を容認し、おおいかくしてしまうものではないか、ただ個人の安心を約束し、ただ忍耐を強いるだけのものではないのかという疑いにも進んでいきます。

じつさい苦しみが恵みだなどと私どもは簡単に口にすべきではない。まして他人(ひと)に向かって言うべき言葉でないの当然です。苦しみ自体に恵みの根拠はないのです。そうではなくてそれは、私どもが他のところに目を向けたときにはじめてそのように言わざるをえないこと、告白することの許されることなのです。その「他のところ」とはどこでしょうか。21節にこうあります、

キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

私どもが目を向けるべきところ、それはイエス・キリストご自身です。私どものために苦しみを受けたイエス・キリストです。このキリストにおいて苦しみが恵みであるという実例を私どもは持っている。聖書が語っているのは、このようにしてキリストに目を注ぐことによってはじめて苦しみは恵みだと私どもは言わざるをえないということです。

「あなたがたのために」は「あなたがたに代わって」という意味でもあります。キリストはご自分の罪や失敗や弱さのために苦難を受けたものではありません。そうではなくて十字架の苦しみとは「自らその身にわたしたちの罪を担って」受けた苦しみでありました。キリストは他人の過失の痛みをご自分において耐え忍んだ、他人の犯し

た罪の後始末をご自分の死をもつてつけた、私どもの罪をあがなってくださいだったので。私どもを私どもの罪の罰から逃れさせるため、そのようにして新しい神関係に生きるため、私どもが罪に死んで義に生きるためであったのです。キリストも苦しみを受けた、それは他人（ひと）を救い、他人を生かした、その苦しみは神の御心に適うことであった、神から来る恵みであった、そのようにペトロはキリストの十字架の苦しみを説くのです。

しかしキリストの苦しみは私どもの罪をあがないのためであっただけではありませんでした。それはもう一つの意味（21節の後半）を持っていました。それを私どもも忘れてはなりません。キリストの苦難の歩みは、私どもも歩むべき模範でもあったというのです。模範と訳されているのは、文字通りには下に書かれているもの、つまり子供が字をおぼえるための下敷き、手本のことです。ペトロはキリストの苦しみはキリストに従う者がその跡をなぞって行くべきものだ、そのためにキリストが私どもに残された道だと語っています。

踏み従うべき足跡はどこに残されているのでしょうか。

ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました（23節）。

これがイエスにもっとも近くいた、それゆえ私どもの特別な注意に値するペトロの、イエスの生き方、あり方についての証言です。「ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず」。この「・・・返さず、・・・せず」。ここにその生き方の特長があります。それは報復の断念です。この世の論理は仕返し論理です。そこまできなくとも私どもはこの大小を問わず反撃する権利はだれにもあると考えます。緊急の場合はいかにしても自分の命を守るのは正当だと考えます。そしておそらくそうだろうと私も思います。しかしこの考えの先でしばし起こることはこうではないでしょうか。仕返しは、私どもの主観的な判断において、つねにやられたことより大きくなるということです。そこに人間の罪があります。口げんかが、やがて殴り合いになり、殴り合いは武器の使用に突き進み、それはいつそう強力なものを持ち出さず済まなくなるということです。悪を押さえるための「善」なるものがより大きな悪を呼び起こしその無限の連鎖という結果を引き起こすということです。罪の人間において善の中に悪が隠れています。

先に私は宗教は、と一般的な言い方で、苦難という忍耐を勧めることによって不正を容認することにならないかという問いを立ててみました。しかしここに来て決してそうでないことがはっきりしてくるように思います。なぜなら悪の連鎖を止めることができるのは、より小さな正義の仕返しではなくて、むしろそうしたことを断念すること以外にないからです。そのようにして苦しむことは、また耐え忍ぶことは決して

不正を容認するのではない、不正を明らかにしつつ、同時にそれを、ここで、今、わたしにおいて断ち切るのです。そのようなキリストの苦しみを、踏み従うべき模範として思い起こしながら歩むことを志す者こそ、キリスト者であると。ペトロは語っています。

3 魂の牧者のまじり

私の尊敬する女性教職に岡田美須子（1907-1993）という方がおられました。愛媛県喜多郡ご出身のこの方は若き日に東京の信濃町教会で高倉徳太郎牧師の指導を受け、後に松山城東教会の牧師として四〇数年にわたり伝道し、教会を形成し、彼女を知る人に多大の影響を与えた方です。岡田先生の残した黙想に、次のような文章があつて、私の記憶に今も残っています。

苦しむことは好きではない。なるべく苦しまないで済むように願ひ、そのように工夫する。しかし苦しみは上からくるのである。避けるいとまもなく、苦しませられる。苦しんでみると、苦しみは大へんありがたいことが分かる。苦しんでいるときにこそ、本当に『生きています』のである。実際に生きていますのである。喜びにおいては空虚な生である。実際に生きていますとは、苦しんでいる時である。苦しんでいることが、生きていくのだ。この苦しみの生においてこそ、神との交渉がある。真実の、実際の神との交渉がある。苦しみにおいてこそ神と顔をあわせてあるのである。

さて自ら苦しみに遭っていたペトロは、同じ苦しみの中にある諸教会とその信徒に、ここまで述べてきたように、キリストの苦しみを思い起こさせることによって励まし、勇気づけ、望みと忍耐を喚起しようとしています。

そのようなペトロにとつて、今日の箇所最後に記されているように、牧者、羊飼いの比喩で神を表すほどふさわしいものではありませんでした。

あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻ってきたのです（25節）。

聖書が旧約聖書いらい、主なる神を牧者、羊飼いになぞらえきたことは、ご存じの通りです。新約聖書はイエス・キリストを善き羊飼いと呼んでいます。彼はつねに牧の羊を守り、養い、時に命をかけて外敵から、多くの危険から私どもを守ってくださいなのです。監督という言葉も、はじめに触れたように、私どもを見守り、訪ね、私どもを顧みてくださる方を指します。牧者と同じ意味です。

さまよっていた私どもはキリストのあがないにより、このキリストへの信仰によつて、今やそのような神のもとに全く立ち返っているというのです。そのときたとえ私どもの置かれていた状況がなお私どもに苦しみを余儀なくするとしても、神は私どもを牧者として見守り手として導いておられます。そのような方のもとにあるなら苦しみを回避することが第一の問題ではない。そうではなくて私どもにとつて重要なことは神を心から信頼し、たしかに「さけるいとまもなく」私どもを襲う苦しみの中でも神と出会い、神と共に生きる

こと以外ではないのです。

(二〇一八年四月一五日)